

心はうちに燃えて イースター記念礼拝

ルカ 24 : 13 - 32

2020年4月12日

前奏

賛美歌 聖歌 171番 『世人よ、歌え』

開会祈祷 松浦役員

主の祈り 松浦役員

導入 今日世界中の教会が、主イエスのよみがえりを祝います。私たちが主イエスの復活を瞑想しながら、蘇りの主を礼拝しましょう。祈りましょう。

祈祷 神様、2020年のイースターの朝を迎えました。毎年、神の家族みんな喜びを持って迎える朝ですが、今年は新型コロナ・ウイルスとの闘いの中で、イースター礼拝を捧げようとしています。神様、それでも私たちは、今から2000年前の不思議な出来事に心を向けます。乏しい想像力ですが、私たちに復活の事実を少しでも理解させてください。私たちの感受性は弱く鈍感ですが、復活の力強い意味を瞑想させてください。また非常に鈍い心ですが、あなたの御言葉をもって私たちに語り掛けてください。そして2000年の時代を超えて現代も、不安と恐怖と混乱の中に在る私たちを、復活の力で励まし立ち上げらせ歩み出させてください。アーメン

2020年のイースター礼拝の説教題は『心はうちに燃えて』です。

聖書朗読 ルカ 24章 13節—32節

約2千年前のことです。金曜日の夕方、主イエスは十字架の上で息を引取られ、誰も葬ったことの無い墓に葬られました。3日後、日曜日の朝早く、主イエスの母マリヤやマグダラのマリヤら、女たちは香料を持って墓に行きました。ところが封印された主イエスの墓は開いており、その上、主イエスのご遺体が無かったのです。さらにその上、天使が現われて、主イエスは死から蘇られた、と言うのです。人類歴史の大転換がなされた日曜日でしたが、12弟子たちは、女たちからそのニュースを聞きましたが、たわごとのように思われて信じませんでした。

絵画2 エマオへの道

その日曜日の夕方のことです。ちょうど、ふたりの弟子が、エルサレムから11キロメートル余り離れたエマオという故郷の村に向かって歩いていました。クレオパという名前は、クレオパドレスの略名（呼び名）で、クロパとも呼ばれる名前でした。ヨハネ 19:25 には、女たちが十字架の足元に居ましたが、そのうちの一人はクロパの妻マリア、とあります。そこでこの二人はクレオパとマリアという夫婦だと推測されています。二人とも主イエスに熱心に従った弟子でしたが、失望落胆し、絶望してふるさとの村に帰ろうと歩いていたのです。

二人にとっては、辛く悲しく困惑の旅だったでしょう。3日前の十字架の出来事は止められなかったのか、自分たちは何と勇気のないものかと嘆きながら、悔いたり、悲しんだり、嘆きながら歩いていたのです。夢破れて自分の田舎に帰ろうとしている時、浮かんで来るのは、ナザレの預言者主イエスに従ってきた3年近くの日々と十字架の結末だったでしょう。自分たちはこれからどうしようか。その道は葛藤とこれからの不安に戸惑う下り坂でした。時は夕方、沈み行く西日に向かう、エマオへの道でした。

そんな二人に、主イエスは近づいて、彼らと一緒に道を歩き出されたのです。しかしふたりには、その人がイエスだとはわかりません。それはそうでしょう。2日前に十字架上の死を目撃したのですから。二人にイエスは言われました。

「歩きながらふたりで話し合っているその話は、何のことですか。」

クレオパは答えました。『ガリラヤの預言者、ナザレ人イエスのことです。私たちは、あの方が病人を癒したのを見ました。さらに驚いたのは、目の見えない人の目に手を置き、そして癒してくださったのです。信じにくいですが、私たちの目の前で、確かに沢山の人に食べ物を与えました。確かにあの方は預言者以上の方でした。あの方は神様から遣わされた方ではないか、私たちは旧約聖書に預言されていたメシア、救い主に違いないと信じて、従っていたのです。

そんな素晴らしい不思議なお方でした。それなのに国の祭司長や指導者たちは、あの方を死刑に定め十字架につけたのです。私たちはこの方こそイスラエルを救ってくださるはずだ、と望みをかけていました。でも私たちの夢も消えました。だってあのお方は死んでしまったのです。多くの仲間たちは情熱も覚めて去り、運動は終わりました。私たちもエルサレムを離れて、自分の村に帰るところなのです。もうすべて終わってしまったのです。』

絵画13 無理に引き止めて 影のイエス ダビンチ

すると主イエスはかなりきつい言葉で、言われました。『ああ、愚かで心の鈍い人たち。あなた方は、あの方が生前語っていたことを忘れたのですか。あの方が、真に真に真実を告げます。と言って、語ったことを信じないのですか。預言者イザヤは、救い主キリストについて何と語っていますか。預言されたメシアは、必ず辱めと苦しみを受けて、すべての人の咎を背負い、人のそむきの罪のために刺し通され、それから神の蘇りのいのちに入る、とあるではないですか。あなた方はもう、すっかり忘れてしまったのですか』

そうこうしているうちに、3人は目的の村に近づきましたが、主イエスはまだ先へ行きそうな様子でした。二人の心には不思議な熱いものが湧き上がっ

ていました。それで彼らは『お泊まりください。そろそろ夕刻になりますし、日もおおかた傾きましたから』と言って無理に願ったのです。イエスは家に入り食卓に着かれると、パンを取って祝福し彼らに渡されました。この時、二人の目が開かれたのです。エマオまでの道のりを、一緒に歩いて聖書を解き明かしてくれたお方が誰であるか解ったのです。するとイエスは、彼らには見えなくなりました。

絵画 16 取って食せよ ダヴィンチ 16

でも見えるか見えないか、それは重要ではないのです。なぜならふたりは言いました。『あの方が道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。』 主イエスの言葉を聴いた時、二人の心がうちに燃えたのです。

人は誰でも、その一生のうち一度は、エマオへの道を歩くものです。人は誰でも『ああ期待をかけていたのに、こんなはずではなかったのに』、そんな風にならうつむいて歩く時があるものです。人は誰でも、人生のうち一度は、後悔と失望落胆の時、そんな道を歩むものです。それは絶望の中、沈んでいく西日に向かってトボトボとエマオへの道を歩くようなものです。

しかし忘れないでください。そんな時こそ、そばに来て私たちに語りかけるお方がいるのです。「聖書には何かがある。ナザレのイエスには何かがある」。少しでもそう感じたら、無理にでも、そのお方を引き止めて、そしてそのお方に聴きましょう。そうすれば必ず、その真（まこと）とぬくもりに触れるでしょう。そうすれば必ず目が開かれて、今まで見えなかった何かが見えて来るでしょう。2020年度の年間テーマ聖句は、「私は戸の外に立って叩いている」ですよ。私のすぐ横を歩いておられる主を迎えてみましょう。

2千年前、彼ら二人の心は内に燃えたのです。それから2千年間、数えきれない人が、主イエスを引き留めて声を聞き、そして心燃やされたのです。

今日はめぐみ教会の創立記念礼拝です。66年前の1954年4月4日第2主日、めぐみ教会の最初の礼拝が捧げられました。恐らくウィンタース宣教師ご家族だけだったでしょう。キリストをまったく知らない日本民族を知り、ただただキリストを宣べ伝えるために、故郷を捨て、家族を置いて日本来たのです。その後ベッカー宣教師、マクルキン宣教師、バーソルド宣教師と続きました。朝岡師はこの記念誌『途上』めぐみ教会20年誌に記しました。『ベッカー氏は大きな体を50ccのモーターバイクに乗せて、背中には聖書や信仰書の入った木箱を背負って、毎週毎週阿見の結核病棟まで通ってくださった。その姿はまこ

とに尊いものを感じさせた。』彼ら宣教師によって、この群れは 10 年間導かれたのです。彼らの心はうちに燃えていたのでしょうか。

3 年後の 1957 年 2 月 14 日に一人の青年が信仰を告白して洗礼を受けました。彼は結核を患い死の床に横たわっていましたが、キリストの声を聞き、心燃やされ、癒されて起き上がりました。元気になった彼は残りの一生をすべて神様のために奉げたいと献身し、1964 年に牧師となってめぐみ教会に戻ってきました。初代日本人牧師の朝岡茂師です。朝岡師の心もうちに燃えたのでしょうか。

それから今日に至るまで、大勢の教職や信徒が、そのうちに燃える思いを持って、この群れを育くみ、建て上げて来たのです。すでに天に凱旋した先輩たち、また今も地方でキリスト者として輝いている仲間たちも、彼らの心も燃えているのでしょうか。

さてでは、今朝、私たちの心は何を持って内に燃えるのでしょうか。それは新型コロナウイルス・ヴィールスとの闘いではないでしょうか。人類は現在新型コロナウイルス・ヴィールスと闘っています。これ以降『新型』は省略します、ご了承ください。

その闘いは、1) 感染拡大を止める闘いであり、2) ヴィールス感染による死者を無くす闘いであり、そして 3) 病原ウイルスそのものを制御する闘いでもあります。コロナ・ヴィールスを制御する新薬開発の闘いは、研究者が必死の努力をしているでしょう。ヴィールス感染による死者を無くす闘いは、世界中の医療関係者が献身的に奉仕しています。そして感染拡大を防ぐために、私たちも様々な自粛をしています。これはヴィールスから逃げているのではなく、闘っているのです。感染経路を絶つために、民衆みんな闘っているところです。

残念ながら現在、コロナ・ヴィールスとの上記 3 面の闘いにおいて、人類はまだ勝利を得ていません。新薬開発には時間がかかるそうで、未だに治療方法がなく、ヴィールス感染による死者も止められません。勝利どころか、逆にコロナ・ヴィールスの進撃を許して、ついにパンデミックを認めざるを得なくなりました。闘いは始まったばかりで、これからが勝負でしょう。

そんな中で今朝は、人類が疫病に対して、真の勝利を得るためには、上記のような科学的側面での闘いと同様、人間性を破壊する感染症との人間性の側面での闘いを自覚したいのです。私たちは疫病が人間性を破壊する力を持つことを自覚しなければならぬのです。

その一つは、正体不明のヴィールスに対する不安と恐怖が生み出す差別との闘いです。感染爆発、医療崩壊、都市封鎖等々のニュースが不安を生み、不安が差別を呼び起こすのです。偏見に満ちた不正確な情報から、『アジア人は出て

行け！』と人種的な差別が生じています。さらには悪意を持って『中国ウイルス』などと公言し、人類の連帯よりも分断を試みる政治家もいます。根拠ない差別は他民族を差別し、人類の人間性を破壊し、殺伐とした社会にしてしまうのです。

次に善良な一般大衆も、この人間性を守る闘いを自覚すべきでしょう。大勢がデマに振り舞わされて『買い貯め』に走ったのです。地域社会の仲間よりも利己的動機が突起してしまうのでしょうか。すでに様々な詐欺が横行しています。『コロナ・ウイルスのワクチンを安くお分けします』というネット商法があるそうです。ワクチンはまだないのですが、実に巧みな詐欺ですね。

さらに小さな人間集団においても冷たい対立や分裂が起きます。疫病に対する姿勢や対策においても分断が起きます。真面目な感染症対策にも冷やかな視線を送ったり、逆に対策に熱心でない者への批判や怒りが爆発したりするものです。こうして不安や恐れから、自己中心になり、他者への配慮が消滅し、人間性（人格、品性）が歪んでしまうのです。

コロナ・ウイルスは、この地上の何処でも誰にでも、同じ危険と不安が襲うのです。感染症は人類全体が直面する闘いです。それは非常にしたたかな疫病です。人類の知性と人間性が試されているのです。人類は科学的側面においても霊的側面においても、勝利を得なければならないのです。

実は人類の歴史はこのような恐ろしい疫病や大災害との闘いでした。例えば疫病がローマ帝国を襲った時代にも、クリスチャンたちの闘いの記録が残っているのです。次の文章は『キリスト教とローマ帝国』（小さなメシア運動が帝国に広がった理由）ロドニー・スターク著 新教出版 2015年「第4章 疫病・ネットワーク・改宗」のまとめです。『です調』から『である調』に替わり、表現がきつくなりますが、ご了承ください。

マルクス・アウレリウス治世の紀元 165 年、疫病がローマ帝国を襲った。天然痘だと言われている。疫病が続いた 15 年間に帝国の 1/3 あるいは 1/4 が感染死し、マルクス・アウレリウス自身も紀元 180 年に病死した。紀元 251 年には、はしかが猛威を振るった。ローマ帝国崩壊の原因の一つは、この疫病による人口減少だと言われている。奇妙なことに、ローマ帝国大混乱の時期に、クリスチャン人口比率は急激に増加している事実がある。その理由に、かつてはローマ帝国の道徳的退廃が指摘されて来た。しかしここでは社会科学的な検証を試みよう。

その第 1 の理由は、多神教や古代ギリシャ哲学では疫病を説明しきれず癒すことも出来なかったからだと言える。逆にキリスト教は、信仰によって献身的

といえる生き方を処方し、希望に溢れた未来像を与えることが出来たからである。町は死臭で満ちている。家族も友人も次々と倒れて行く。そんなすさまじい状況で、人は人間以上の者に『何故か、どうすれば良いのか、どうなるのか』、と問わずにいられない。多神教は形だけの儀式や祭りは熱心だったが、この悲劇の中では何も答えてくれない。そして何もしてくれない、金持ちや神官たちはもう町から逃げ去ってしまっているのだ。そんな異常事態で、カルタゴの司教キュプリアヌスはキリスト者会衆に向って説教する。

『この疫病は恐ろしくて致命的と見えるが、我々の正義や信仰を吟味するために必要なかも知れない。健康な者は病気のを世話したか？近親者が親族を最後まで愛したか？主人たる者は衰弱した使用人に同情したか？病気で召された兄弟たちは失われたのではなく、この世から解放されて派遣されたのだ。召された兄弟たちをあたかも消え失せたかのように嘆き悲しむならば、我々が口で表した信仰も無意味だと、異教徒たちが言いふらす機会を与えてしまうだろう』

キリスト教徒は疫病と死の中でも、その生に意味がある、そして身体の生命以上の希望と慰めを提供したのである。要するにキリスト教は、当時の病気と横死が支配する混乱の時代にも、多神教と違って、その恐怖と混乱に対応できた思想と感情の一体系だったのである。

その第2の理由は、愛と奉仕というキリスト教の価値観が『社会奉仕と連帯』という規範を生んでいた事実にある。キリスト教の教義が危機の中で『行動の処方箋』を提供したのである。アレキサンドリアの司教ディオニシウスは手紙の中でこのように記している。

『異教徒らは疫病に倒れたばかりの者さえ敬遠しました。半死の者を路上に投げ出し、葬られていない死体を手ひどく扱いました。彼らはそうすることによってこの死病の蔓延と伝染を裂けようとしたましたが、逃れられませんでした。

クリスチャンたちの振る舞いはまさに逆でした。私たちの兄弟の大半は愛と兄弟愛から互いを思いやり、危険を顧みずに病人を訪れ、優しく介護し、そして彼らと共に喜びの内にこの世を去りました。彼らは隣人の病を自らの側に引き寄せ、その苦痛を進んで自分のものとししました。私たちの兄弟の中の、最も立派な人たちがこのようにこの世の生と決別したのです。それは敬神の念と強い信仰の結果で、決して殉教に劣るものではないと思われました。』

災難が襲った時にクリスチャンたちは互いに助け合い、結果、彼らは異教徒よりも実質的に高い生存率につながったと思われる。だが当時は感染者との接触を避ける以上に疫病を治療する手立てがなかったので、介護してもしなくて

も死亡率に大差はなかった、とする意見もある。しかし事実は違っただろう。罹患し倒れた者は、捨てられれば自力で水も得られず、虚しく死を待つ以外にない。しかし誰かから水と食べ物だけでも得られれば、快方に向かうことも大いに在り得るのだ。しかも回復した者はさらに大胆に奉仕したであろう。こうしてクリスチャンの生存率は異教徒のそれよりも想像以上に高かったと推測できるのである。

その第3の理由は、クリスチャンの社会的ネットワークの力であった。疫病で家族や親族が死ぬと、人は既存の人間的愛着関係を失う。その時多くの人々は死の恐怖の中でも互いに命がけで助け合うクリスチャンのネットワークに引かれたのである。疫病死の恐怖と罹患の不安の中で、献身的奉仕者の群れと、たとえ死んでもその生に意味有りとな励ますネットワークを選択したのである。そのネットワークとは教会であった。しかし教会堂ではなかった、それはまだ無かった。それは信徒の群れであり、信仰者のネットワークであった。

そして著者は、1) このキリスト教信仰の教理と、2) クリスチャンの愛の実践と、3) クリスチャンのネットワークが、ローマ帝国大混乱の時期に、結果的に、クリスチャン人口比率を急激に増加させたのではないかと結論づけるのです。

これは紀元1・2世紀の出来事です。死を覚悟して看病に当たったクリスチャンたちは、その心が内に燃えたのでしょう。原因不明の致死率の高い疫病に、マスクも手袋も防御服も無く、まさに命がけで、仲間を看病したのですからね。

しかしこのような献身的な奉仕は、別にローマ帝国時代のクリスチャンだけではありません。今も、何千何万人もの医療従事者は、コロナ・ヴィールスの罹患者（りかんしゃ）の治療のために働いているのです。直接患者に触れるからでしょうか、医療従事者が発病し死に至る%が一般人より高いそうです。まさに彼らは命がけで働いているのです。

有名音楽家がビデオを作成して、軽症患者を励ましたりしています。マスクを作って配布しているお寺のニュースを見ました。数えきれない人々が、この不安と恐怖の中で、自分ができることを持ってこの感染症と闘っているのです。

先週アメリカ ABC のニュース映像を見ました。病院で感染者を看護して疲労困憊し、何日ぶりかで帰宅した看護婦さんが車から降りて周りを見た時、突然泣き出したのです。隣近所の人々が玄関先に出て、大きな拍手をして彼女を迎えたのです。命がけでコロナ・ヴィールスと闘う彼女に、感謝と敬意を表した

からでした。ニュースの最後にキャスターのデイビッド・ミューアの眼も涙目になっているのを見て感動しました。それは単なる拍手でした、しかしそれは彼女を応援するコミュニティーの連帯を証し、今人類全体が疫病と闘っているという人類の一体性を強烈にアピールしたものでした。

このように、危機の時こそ、人類は知性を尽くして疫害と闘って勝利を得、心を尽くしてその人間性を守って来たのではないのでしょうか。

振り返ると、聖書の神に信頼するクリスチャンたちも、危機の時にこそ輝いて来たのではないのでしょうか。聖書の神はいたずらに私たちに苦しめはしない。慈しみに富む神は、人類が困難の中で滅んでいくのを許されない。万物の創造者である神は、御自身の像に似せて創造した人類を、その像をゆがませる敵との闘いに負けることは許さない。天の父はご自身が創造された人類が一致団結して、このヴィールスに勝利することを期待しているはずなのです。

主イエス様の蘇りを記念する今朝、私たちは、主イエスと出会って心燃やされた二人の弟子を心に止めました。彼らは、絶望のなかでから希望のニュースを聞きました。後悔してうつむいていたのに、主イエスに出会い喜びました、不安と無力感からもと来た道に帰りつつあったのに、これからはすべきことは何か、今自分に出来ることは何か、と前向きに生き始めたのです。そしてすぐにエルサレムの仲間たちのところに走って帰ったのです。

今朝、私たちもよみがえった主イエスの声を聞きました。もし心がうちに燃えたなら、仲間と一緒に祈りましょう。

全員祈禱 祈りましょう。予想もしなかった闘いの中に在ります。この新型コロナ・ヴィールスとの闘いに、知性をつくして勝利し、また心を尽くして、内に在るあなた様の像を守ります。お導きください。

応答賛美 聖歌 568 『み恵みの高嶺に』

紹介と報告 洪師

頌栄 2020年テーマソング

祝禱 道々お話しになっている間も、聖書を説明して下さった間も、私たちの心はうちに燃えていたではないか。 ルカ 24 : 32